

いなかおか

東京都世田谷区歯科医師会会報
<http://www.setagaya-da.or.jp/>

IV

2005

No.149





東南アジア旅行の知的楽しみ方 「インド化」された国々へ 遺跡の旅—XXI

下馬部会 齋藤賢一

今回はヴィシュヌ神の乗り物（ヴァーハナ）で、鳥類の王、神鳥ガルダのお話をしたいと思います。ガルダはインドはもとより東南アジアで人気が高く、特にインドネシアでは国章や、ガルダインドネシア航空の名前やシンボルマークになっております。日本にも仏教の八部衆の迦楼羅天や、金翅鳥として伝わっております。八部衆とはヒンドゥー教の神々が仏教に



写-1 「迦楼羅天」
興福寺 小川光三（飛鳥園）

取り入れられ、仏法の守護神となったものです。興福寺の国宝館にある阿修羅も八部衆の一人で、ここにある迦楼羅天も素晴らしい出来です（写-1）。伎楽面としても沢山残っており、どんな音楽で、どんな踊りをしていたか夢が膨らみます。山岳信仰の「からす天狗」もガルダと修験道が融合したものと思われま

す。ガルダの体は人間で頭とくちばし、翼、爪は鷲の形で顔は白、翼は赤、身体は金色に輝き、また自在に身体を大きくも小さくも出来ます。ガルダの神話は「ガルダの母親は蛇族の母親と賭をして負けたため（蛇族にだまされた）蛇族の奴隷になっていた。ガルダは母親を解放してもらうため蛇族と掛け合った。



写-2 「母を運ぶガルダ」
キダル 東ジャワ

彼らの要求は神々の秘宝である霊薬アマリタを持つてくることだった。ガルダは神々の住む天界へ向かう。アマリタを守る神々を次々と破り、ようやく霊薬を手に入れた帰路、ガルダの前にヴィシュヌ神が現れた。激しい戦いが続いたが、両者とも一歩も譲らず、ついにヴィシュヌ神はガルダの強さに驚嘆し

て、アマリタを与え、高い座につかせる代わりに私の乗り物になってくれないかと提案した。ガルダはこれを受け入れた。次にインドラ神が現れた。インドラ神もガルダの強さに驚嘆し、何か望みを叶えてやると言った。ガルダは今後は蛇が私の常食になるようお願いした。またアマリタを蛇族へ与えるつもりはないので、蛇族の前においたら直ぐに持ち去って下さいとお願いした。蛇族の元へ戻ったガルダはアマリタをクシャ草の上に置き、沐浴をして身体を清めた後にこれを飲みなさいと言った。蛇達は慌てて沐浴場に向かった。その時インドラ神が現れアマリタを持ち去ってしまった。蛇達が沐浴を終え戻るとアマリタはなくなっていた。仕方なしにアマリタが置かれていた



写-3 「蛇を運ぶガルダ」
キダル 東ジャワ



写-4 「アマリタの壺を運ぶガルダ」
キダル 東ジャワ



写-5 ヴァイクンタ・ベルマール寺院
カンチープラム

なぜガルダがヴィシュヌ神の乗り物になったかがわかったと思います。従ってガルダが祀られているのはヴィシュヌ派の寺院に多く、ほとんどがガルダに乗るヴィシュヌという形で彫刻されています。今回はおもにガルダが単体で表されている寺院を見学したいと思います。

それではまずインドに行きましょう。南インドのカンチープラムにある8世紀中頃にナンディヴァルマン2世によって建立された、ヴァイクンタベルマール寺院はヴィシュヌ神に捧げられた寺院で身舎から屋蓋までヴィシュヌ神話の彫刻が一面に彫られています。ちなみにヴァイクンタとはヴィシュヌ神の住む天国です。この寺院の入口の門の上にガルダの彫像が鎮座しています(写-5)。カンチープラムはとても熱く、寺院を見学して車に戻ると、熱くてドアが開けられません。本当にボンネットが目玉焼きが出来ます。

同じく南インドのアイホーレにあるクンティ寺院の祠堂入口のドアフレームの上部にあるガルダの彫刻です(写-6)。7世紀のものと思われます。インドの寺院では内部のドアフレーム上部に、その中に祀られている神のミニチュアや乗り物の彫刻がしてあるので、中の神がなくなってもどんな神が祀られていたかわかります。もちろんこの寺院の本尊はヴィシュヌ神です。



写-6 クンティ寺院 アイホーレ

カルナータカ州のベルールにあるチェンナケーシャヴァ寺院は12世紀のホ

イサラ朝の建立で、ケーシャヴァとはヴィシュヌの別名です。ホイサラ朝の寺院は彫刻が細かく繊細で建物全体が埋め尽くされています。この寺院の境内に珍しいガルダの立像がありました(写-7)。この寺院はとても大きく、インド人の観光客が沢山来ていました。面白いことに北インド



写-7 チェンナ・ケーシャヴァ寺院 ベルール

と南インドでは言葉が全く通じないため、北の観光客は北の言葉がしゃべれるガイドをつけるのです。もちろんおもみやげ物屋でも我々外国人と同様にぼられています。

今度は東南アジアの寺院を見てみましょう。ミャンマーのパガンはほとんど仏教寺院ですが13世紀のタンブラと言う仏教寺院の入口の上の破風にガルダを見つけました(写-8)。ナーガの上に乗り、その上に顔がありませんが蓮華の上に座すブッダが彫刻されています。ガルダの上にはヴィシュヌ神と決まっていますが、インドではブッダもヴィシュヌ神の化身とされているので妙に納得してしまいました。左側にはキンナラが彫刻されています。内部の漆喰に描かれた仏画もとてもよい出来です。

ベトナムではチャンパ遺跡で二番目に古い、パンドゥランガ(現ファンラン)と言う8世紀の王都にあるホアライ遺跡にガルダが彫刻されていました(写-9)。この遺跡は祠堂が3つ並んで建っていましたが、現在中央の祠堂は崩壊しており、一番保存状態の良い北側の祠堂の上部にありました。レンガ造りですが残っている美しい文様から当時



写-8 タンブラ寺院
パガン

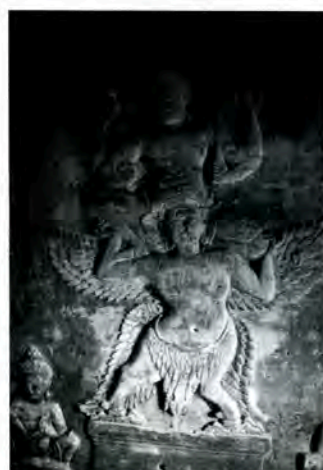


写-9 ホアライ遺跡 ファンラン

カンボジアのアンコール遺跡ではジャヤヴァルマン7世が12世紀に建立したプリア・カーン寺院の外壁にガルダが連続して彫刻されています(写-10)。両腕をあげてナーガを引っ張り威嚇するようなこのポーズは王宮にある象のテラスや、バンティアイ・クデイ寺院にも見られます。



写-10 プリア・カーン寺院
アンコール



写-11 プラサット・クラヴァン寺院 アンコール

が偲ばれません。しかし保存がしっかりしていないため、この祠堂もやがて崩壊しそうです。

10世紀にハルシャヴァルマンがヴィシュヌ神に捧げるために建立したプラサットクラヴァン寺院はレンガ造りですが、このレンガに直接彫られたガルダに乗るヴィシュヌ神は素晴らしい出来です(写-11)。この地方独特のクメール帽をかぶったガルダは、同じクメール帽をかぶったヴィシュヌ神ととても良く似合っています。

同じく10世紀に建立されたバンティアイ・スレイ寺院はシバ神に捧げられた寺院です。祠堂は同一の基壇の上に3つ並んで建っており、それぞれの正面には、ガルダや猿や獅子の頭を持った人間の座像が一對ずつ入口を守っています。残念なことに顔面がなくなったり、崩壊がひどく、ガ

ルーダは残っていません。このガルダがプノンベン博物館にあります(写-12)。赤色砂岩で出来たこの像は傑作です。

インドネシアの遺跡では、中部ジャワ時代(7~10世紀)にはヒンドゥー教としてはシヴァ派がほとんどで、ガルダの彫刻はあまり



写-12 プノンベン国立博物館
アンコールワットとクメール
美術の1000年展

にはガルダの彫刻が沢山見られます。まずは東ジャワのマランの町近くにあるキダル寺院へ行きます。ここの基壇に先程のガルダ神話の彫刻があります。母を運ぶガルダ、蛇を運ぶガルダ、アムリタの壺を運ぶガルダの三態を南、北、東の三面に浮き彫りにしてあります(写-2、3、4)。この神話は「ガルデア」としてインドネシアで良く知られています。東ジャワ時代は仏教とヒンドゥー教の融合が盛んになり、特にブッダとシヴァの融合が顕著です。

バリ島ではガルダはとてもポピュラーで、何処のおみやげ物屋でも木彫りのガルダを売っています。ライステラス(棚田)がとても美しいウブドゥの村の森の中に通称モンキーテンブルと呼ばれるブキット・サリ寺院があります。この森には悪戯好きのサルが沢山いて、いきなり観光客に飛びかかり、バックや眼鏡、カメラなどを持って行ってしまいます。この森を慎重に抜けると、そこにはバリで一番素晴らしいガルダ像が待っています(写-13)。これを見るためならサルの恐怖は何のそのです。

今回インド、東南アジアとガルダの彫刻



写-13 ブキット・サリ寺院
ウブドゥ

を見てきました。ガルーダは空想上の動物ですが、おそらく毒蛇（コブラ）を鳥が食べるのを見て神に見立てたのだと思います。実際猛禽類だけではなくクジャクも蛇を食べます。またその蛇自身もナーガとして強烈な毒と神秘的な習性によってインド全土で畏怖され、崇拝されています。この様に自然の驚異に畏敬の念を感じる人々によって生まれた仏教やヒンドゥー教はその土地の精霊崇拜（アニミズム）と融合出来る柔軟性が基本にあります。それはアジア人共通のアイデンティティーかもしれません。ミャンマー、タイ、カンボジア、ラオスの人たちは上座部仏教（小乗仏教）ですが、在家の人たちは、もちろん敬虔な仏教徒ではありますが、現世利益を求めて、精霊崇拜も同時に行

います。ミャンマーではナツ神、タイ、ラオスではピー、カンボジアではネアック・ター、ベトナムではバーントーなどの精霊です。日本人が困ったときや、願い事をするときに、神社に出かける様なものです。生まれて神社にお宮参り、教会で結婚式、葬式は仏教、お盆でお寺にお墓参り、クリスマスは教会で、お正月は初詣に神社へ、そのわりに自分の信仰する宗教はない。自分の家の宗派も知らない。これが平均的な日本人だと思います。この節操のなさ、言い換えれば何でも受け入れる柔軟性が日本人の良いところかもしれませんし、これが世界基準になったとき世界平和が訪れるのかもしれませんが。